様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 ２８ 日現在

機関番号：３３４０３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｋ００２４０

研究課題名（和文）アートによる地域再生の実践的検証―障害者アートと地域アートの未来像を探る試み

研究課題名（英文）The practical prouve of the rebirth of the local region by the art-investigation of the future image of the art by the handicapped people and the art of local region

研究代表者
三脇　康生（miwaki, yasuo）

仁愛大学・人間学部・教授

研究者番号：４０３５２８７７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：地域アートはヴァンギャルド芸術の行き着く先、一方、アール・ブリュットはそんな不景気な邪気を払う天才アートであるという構えが東京オリンピック・パラリンピックの時期に頂点化。コロナ禍邪気を払うオリンピックの勢いも一段落、少子化による地域の疲弊が残る。経済的見込みの暗さにより地域という言葉に生き残りを賭ける教育業界の有様も明確になる。この間、ポストモダンから東日本大震災でトラウマ・サバイバーズ・ アートの勢いが加速。
アートがこれだけ政治利用される以上は、アヴァンギャルド自滅戦法、廃業の連呼より、廃業の練習を延々行うことに尽きる。それが縁側アート。その場をただの物にしてはならない、物事にするべきだ。

研究成果の学術的意義や社会的意義
地域アートとサイトスペーシフィックアートの区別をしない、障害者アートとアール・ブリュットの区別もしない、要するに議論を避ける形でアートが政治利用された。社会の繋がりが希薄化しているのに相変わらず「地域」や「障害」を使う。
この間、ポストモダンアートから東日本大震災でトラウマ ・サバイバーズ・ アートの勢いが加速。アートがこれだけ政治利用される以上は開き直り、縁側アートとでも名づけるものを開始したい。縁側は物にしてはならない、しかし事だけにするのはカルト性を招くので、只物ではなく物事にするべきだ。ただ日本でこのことは西田幾多郎や木村敏が楽々と論じているので、その無の思想、死の思想に距離を取る。

研究成果の概要（英文）：regional art is the final destination of avant-garde art and art brut is the art of genius against the end of avant-garde art. This type de opinion was shared among the japanese people at the Tokyo Olympic and Paralympic. But after such kind of mood of festival, it remains the heavy situation of each region because of law rate of birth. They try to use the term of region as the counter against the economical difficulties in the field of the education specially in the university.
However we try to not to abuse the suicidal method of avant-garde, that is to say in contrast to the method, we try to find the veranda which is movable and which does not easily fall in the state of suffocation.

研究分野：精神医学

キーワード：地域アート　アール・ブリュット　トラウマ ・サバイバーズ・ アート　廃業　廃業の廃業　縁側

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

前回の科研費研究「 アートがつくる新たな支援者関係、その実証的研究」（2016－2018）の発展を狙ったはずであった。前回の結果を開陳すればまず以下である。

フランスのリールではアール・ブリュットを近現代美術とともに展示するリール現代美術館の活動が有名であるがしかし、リールでは、地域のアーティストおよび医療セクターの中の住民の素朴なアート活動の地精神保健 サービスへの参画を、支援者と被支援者の同僚関係の構築の具体的方策と考えていることが分かった。フランスの北部の地方の経済的な苦境の中でこそ、リールのような地方の支援者関係が考案され得ることが分かった。それは、ただアートを用いれば、柔らかい医療保健福祉が可能であると信じることではない。リール東地区がモデルとしたイタリア精神医療においてはまさに、支援者と被支援者の関係が、支援者のパターナリズムか、被支援者の世話を焼きすぎるマターナリズムへ落ち込まないで、「オペラトーレ」として全職種が動くことかが最も重要なポイントであった。「オペラトーレ」は、英語のオペレーターとは全く異なる意味を持っていた。メタ専門性を持つことを含む込ませるために、スタッフのことを「オペラトーレ」と呼んでいた。これに対して、リールでは 「オペラトーレ」という概念はない。それがゆえに逆に、アートを使うことで「オペラトーレ」の役割を実践しようとしたと言える。リールはトリエステの地域精神保健から学んだことを発展的に実践していた。我々は、この「オペラトーレ」性を、アートが地域に開かれた滋賀と施設内でアートを使用しようと試行し始めた福井の有名な施設に探しに行くことを目的にして、人類学的、芸術学的、精神医学的フィールドワークを軸に研究しようとした。

２．研究の目的

連携と一言で言う場合、現に被支援者を前にした治療者が連携者を当てにして自己責任を避けようとするだけの風潮が日本には多く見られ、このことを厳しく批判することが「オペラトーレ」概念の使用の目的であった。この用語を実際の支援箇所、地域に開かれたアートで有名な滋賀、施設内の限定したアート活用の福井という前提で開始し、「オペラトーレ」性を滋賀と福井を結び導き糸として、むしろそこから全国モデルを提示しようとする目的もあった。しかし、コロナ禍によりこのような前提はまったく崩れていく。開いているところも閉じる。閉じているところでむしろ細い開けも出た。よってともかく動いているところに訪問を試みる、それが無理なら以前の科研で出会えたコラボイレーターから聞き取り、言わば「オペラトーレ」性そのものの人と対話し、その人が働く施設での日本語での「オペラトーレ」性に当たるものを掴み取ろうとした。

３．研究の方法

<国内研究>

本来は施設への共同活動を仕掛ける予定であったが、高齢者のいる場所は出入り不可能となり、急遽、急変に備えて、状況を見ながらの介入機会の探索となった。しかし開始時は遠隔で成安造形大学から施設にアクセスを試みてうまくいった部分ある。それにしても、いかんせん長く継続してできるほどの日常生活への介入はできなかった。利用者の方も、これは非日常であるという期待も込めた想いが強かったからである。深追いは諦めた。

今回の科研研究では、我々のフィールドの周りで、滋賀県であると近江八幡のアール・ブリュット活動と「地域アート」の兼ね合いの参与観察なども、催しに参加して行うことも計画してはいた。しかしコロナ禍で「地域アート」は遠隔展覧会になり、またアール・ブリュット活動の混乱に遭遇したなどのため本格的なコンタクトは控えることになった。福井県では障害者施

設、病院には出入りできず、むしろ地域在宅、医療の進み方が、福井県は特区的な突出をしており、こちらでのアートの使い方をフィールドとして用いることを改めて予定したが、これもコロナ禍で控えめな観察となった。この理由ゆえに、一年研究期間の延長を行った。幸い、コロナ禍が落ちついてからは、戸外を使う活動（滋賀県の堅田の街での学生の介入の活動や福井県の今条の屋台カフェ）に研究チームは参加できた。

それ以外は、前の科研研究で出会えた主な支援者にインタビューなどを行い、録音を起こし実績とした。それ等は以下の研究成果のところで記載した報告書に録音起こししてテキストの形で収納した。

＜国際研究＞
しかし一方で、国際的な研究は、リールで市民のアートの形で「オペラトーレ」の発想を取り入れたジャンリュック・ローラン医師の大きな力添えを得て、大きく前進した。ジャンリュック・ローラン医師との対談、インタビューを、京都国際マンガミュージアムの展覧会縮小社会のエビデンスとメッセージ・人口・経済／医療・福祉／教育・文化／地域・国際、そしてマンガ 2022 年 1 月 22 日(土) ～ 5 月 16 日(月)
にて、会場実写した。このように、ジャンリュック・ローラン医師を三脇康生との対談録画に招聘でき（ボランティアにて）その映像を展示することができたのは、いままでの科研費研究の蓄積による。インタビューに三脇が翻訳をつけて、詳しく解説したリーフレットも会場に置いた。このことでアートと「オペラトーレ」性の関係を論じる場を確保できた。ジャンリュック・ローラン医師との対談のそのままの乗りで、屋台カフェという社会的処方を兵庫県の豊岡で行う守本陽一医師を招き、屋台カフェを実演してもらい、この実践について京都国際マンガミュージアムで三脇、服部とで、守本を囲み、ソーシャリーエンゲージドアートの形で鼎談を行い鼎談提示の会場には当時の予想を大きく超えてしまう多くの人が集まり（マスク着用は厳守）注目を集めた（守本の招聘は分担者の服部の予算で行った）。この時は、どうしても見たいと特に役人層の願望が強かった。このようにアート作品は「物」であると勘違いしたままのアート愛好家としか言いようのない人には、恐らくは、その愚鈍な頭に穴があくような刺激となったと聞く。

４．研究成果

＜成果＞
『成果報告書、アートによる地域再生の実践的検証―障害者アートと地域アートの未来像を探るー２０k００２４０―報告　遅らせる医療と縁側アートに向けて』
上記を２０２４年3月２１日にこの科研費にて出版した。以下、その内容の要約と今後の課題を記す。
「地域」という言葉は日本では死語となった様子すらある。学生の募集に学校が生き残りをかけて使う、当事者にとっては切実な経営用語である。しかしこれは、ギリシャの奴隷の行うレイバーのニュアンスがある場所のニュアンスのある単語になりかけている。「地域のお祭」が、今や「地域再生行事」とも力を入れて呼び直されている様子があろう。今こそ、逆に、「地域」という言葉を連発することに、戸惑いを感じ、距離を知らねばなるまい。我々が考察しようとした「地域アート」はよって、当然、このままでは、その生命の火が消えるだろう。「地域アート」の創始者と見做される北川フラム氏とはこの科研研究の年度が終わる直前に京都でお目にかかり詳しくお話しできたが、彼のディレクターとしての能登、嬬恋などの「地域」への入り方は、彼の趣味など超えた迫力と想像力があり、尚且つ、それに参加しつつ制度批判するアーティストの川俣正（本報告書にも参加）の存在も大きなものだった。こんな自分のやり方を批判するものを受け入れられるような存在無しの「地域アート」は消滅していていくしかない。主催者の自己満足には、「地域」は従わないし、経済資源になるかどうかを行政も見ている部分も大であろうからである。言わば「地域アート」が「アート」に切実でも、「地域」に切実なアートは「屋台カフェ」の方にあったのだと考えた。このように考えると、やがては今後の日本には例外を除くと、アート限界集落ができつつあると予想できた。
また「障害者アート」の方は、フランスで名付けられたアール・ブリュットと誤解混同されたままで東京パラリンピックを日本は迎えかけた。しかしアール・ブリュットの名付け親ジャン・デュビュッフェは、精神の病の人のアートがないのは、膝の悪い人のアートがない、腹を壊した人のアートはない、それと同じだと言っていたのだ。シュールレアリズムの名付け親のアンドレ・ブルトンとは一時的には接近するも、ブルトンの狂気の信仰とはジャン・デュビュッフェは大きな距離を置くし、実際に絶縁している。日本にアール・ブリュットがあ

るとすれば、どのような定義を設定するのか、しかもカタカナで、どうするのか。まだ議論の途中だが、「地域アート」との出会いは日本のアール・ブリュットは頻繁ではないと予想できた。また偶然だが、被支援者の表現をアール・ブリュットという枠組みを使い編集し積極的に動いて返って困難が出た機会にも遭遇した。アクセスを遠慮せざるを得なくなった。経緯は全く不明であるが、ネット上には当事者のアサダワタルの深刻な証言が存在している。とにかく「地域アート」とアール・ブリュットの遭遇にはこの科研では介入できなかった。
いずれにしろ、「アート」支援活動も無理をするのは困難を招く。やはり「アート」を使い急いでは元も子もない。アヴァンギャルドの生き残り戦略と何にも変わらなくなるからである。本報告書に収録した、信楽青年寮の支援者との鼎談には急ぐ様子とは異なった様子を収録できた。
＜結果的考察＞
以上このように、「地域アート」と「障害者アート」の掛け算をするにも日本ではまだ議論の枠ができていないことがわかった。福井県の武生近辺でも武生国際音楽祭も長い歴史があるが、伊勢大神楽の歴史もある。しかしこの二つの文化の交流があるわけではない。それでいいのだろうし「地域アート」としてそれらをまとめる必要もないのかもしれない。まとめるのはむしろ不自然かもしれない。とするとアートで地域越ししするときの掛け声が「地域アート」であるのかもしれない。そうなってしまうとしたら、やはり冷静に分析していくべきだろう。「障害者アート」をそのような「地域アート」に巻き込みすぎると表現を辞めたい障害者に辞めないでくれと迫るリスクもあるとわかってきたからだ。
＜今後の課題＞
ここで今、我々が、前の科研から意識しているのは人類学者 Alfred Gell の著作、art and agency である。日本画研究の辻惟雄が『徽宗の系譜』１９７０年で始に書いたように現代美術のあり方に巻き込まれつつ日本から距離を取れないで書き出しているが、これこそ Alfred Gell の著作、art and agency、oxford、１９９８年の意図に図らずも近い態度となる。障害者アート信仰者は、特性の問題に接近する時に、人類学的な視線を獲得しないで、美的鑑賞眼で近づく。するとそれはいきなり医学と結託し実験動物扱いを開始する危険性がある。辻はそれから逃走していた。それは自分も含め agency で考察できたからである。生活の中から出てきた作品を生活の中で見る。これは当然、Alfred Gell の著作、art and agency にならざるを得ない。Ｐ２９にあるように、Alfred Gell の著作、art and agency では、artist,index,prototype,recipient の四項目を agent と patient の二つの側に分けて掛け算して見取り図を描いている。パース哲学のアブダクションがどうしても主要な概念になるようであるが、この点は Alfred Gell の著作、art and agency の良さもであり、弱点でもあるだろうから、考察を加えていきたい。少なくとも、このような図を討論の議場に上げないでおくと、美術界がアール・ブリュットと言い出す所作が医学的すぎて、結果的に差別的にならざるを得ないのは誰の目にも明らかであるので、これも今後は大きく問題として取り上げて記述していくことにしたい。この意味で、ハンナ・アーレントを持ち出すまでもなく、身の回りには、もう「障害」に対する悪の愚鈍さ、愚鈍な悪が「地域」に浸透している。だから我々はここから逃走する。浅田彰とはここは共闘したい。キィワードは縁側と、遅らせる医療である。この成果は、書籍化される予定である。ただし、既成の美術業界が、この Alfred Gell の著作、art and agency を使うと大きく伸びるのか、「地域」や「生活」に縮み上がっていくのかは、なお慎重に見る必要がある。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計7件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 石川亮	４．巻 12
２．論文標題 「近江の懐をめぐる6」	５．発行年 2023年
３．雑誌名 成安造形大学附属近江学研究所紀要 第１２号	６．最初と最後の頁 36-44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 三脇康生	４．巻 2020-2021
２．論文標題 井田照一と木村秀樹	５．発行年 2022年
３．雑誌名 「clas」2020-2021	６．最初と最後の頁 20-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 三脇康生	４．巻 16
２．論文標題 強度・ウォーホル・花村誠一	５．発行年 2021年
３．雑誌名 仁愛大学附属心理臨床センター紀要	６．最初と最後の頁 31-41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 服部正	４．巻 第19巻第1号
２．論文標題 新型出生前診断がもたらすトラウマ、そのアートによる回復支援について	５．発行年 2021年
３．雑誌名 トラウマティック・ストレス	６．最初と最後の頁 35-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 服部正	4．巻 38
2．論文標題 長沢秀之に聞く：対話「私が生まれたとき」プロジェクトとは何だったのか	5．発行年 2022年
3．雑誌名 民族藝術学会誌　arts/	6．最初と最後の頁 127～136
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 服部正	4．巻 増刊第12号
2．論文標題 アール・ブリュットの限界とアートの力	5．発行年 2020年
3．雑誌名 臨床心理学	6．最初と最後の頁 190-195
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 三脇康生	4．巻 22(1)
2．論文標題 今後の現代日本の精神医学はオープンダイヤローグでよいのだろうけれども，　かなり条件がつくことになることについて	5．発行年 2023年
3．雑誌名 こころと文化	6．最初と最後の頁 61-89
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計8件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 三脇康生
2．発表標題 精神医学におけるポストモダンとは何だったのか
3．学会等名 精神病理学会
4．発表年 2022年～2023年

１．発表者名 三脇康生
２．発表標題 ニューロダイバーシティの今
３．学会等名 多文化間精神医学会
４．発表年 2022年～2023年

１．発表者名 三脇康生
２．発表標題 中井久夫、木村敏、共通感覚
３．学会等名 多文化間精神医学会
４．発表年 2022年～2023年

１．発表者名 三脇康生
２．発表標題 木村敏とヴァイツゼッカーとウリの思想の関係について
３．学会等名 精神病理学会
４．発表年 2021年

１．発表者名 三脇康生
２．発表標題 木村敏の『あいだ』と中井久夫の『治療文化論』を交差させる
３．学会等名 多文化間精神医学会
４．発表年 2021年

１．発表者名 三脇康生
２．発表標題 現代精神医学におけるドゥルーズの位置　その文化精神医学的考察
３．学会等名 第２７回、多文化間精神医学
４．発表年 2020年～2021年

１．発表者名 三脇康生
２．発表標題 中動態、それは中井久夫と木村敏でどう違うのか、アートも参考に
３．学会等名 第３０回　多文化間精神医学会
４．発表年 2023年

１．発表者名 三脇康生
２．発表標題 お夏清十郎の非中動態が壊されないようにしなければならない
３．学会等名 第30回　多文化間精神医学会
４．発表年 2023年

〔図書〕　計4件

１．著者名 tadashi hattori	４．発行年 2022年
２．出版社 edition in press	５．総ページ数 224
３．書名 la douleur ; l'ouvre, corps, art, folie　L'art brut japonais sans folie et sans corps	

１．著者名 三脇康生,細澤仁、成田義弘、祖父江典人、木村宏之、近藤麻衣、岩黒拓、小尻与志乃、古井景、増尾徳行、若松彩花。上田勝久、西坂恵理子、日野映、浜内綾乃、平野直己、筒井亮太	４．発行年 2022年
２．出版社 誠信書房	５．総ページ数 391
３．書名 日常臨床に活かす精神分析２	

１．著者名 三脇　康生	４．発行年 2021年
２．出版社 ナカニシヤ出版	５．総ページ数 136
３．書名 臨床の時間 素の時間と臨床	

１．著者名 山田奨治　服部正　三脇康生等	４．発行年 2023年
２．出版社 思文閣出版	５．総ページ数 208
３．書名 縮小社会の文化創造 ： 附:「縮小社会のエビデンスとメッセージ」展の記録	

〔産業財産権〕

〔その他〕

Le CCOMS
https://www.epsm-lille-metropole.fr/le-ccoms

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	馬場　晋作 (baba shinsaku) (30739876)	成安造形大学・芸術学部・准教授 (34201)	
研究分担者	服部　正 (hattori tadasi) (40712419)	甲南大学・文学部・教授 (34506)	
研究分担者	石川　亮 (Ishikawa ryo) (80645945)	成安造形大学・芸術学部・准教授 (34201)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計1件

国際研究集会	開催年
縮小社会のエビデンスとメッセージ 人口・経済／医療・福祉／教育・文化／地域・国際、そしてマンガ 2022年1月22日(土) 〜 5月16日(月)	2022年～2022年

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
フランス	リール精神保健人材センター			